

# 医学分館創立百周年記念展示会開催報告

横山 美佳

医学分館は、大正4(1915)年12月に附属図書館医学科分館として設置され、平成27年12月に創立百周年を迎えた。1世紀に渡って収集されてきた蔵書は43万冊を超え、学内のみならず、東北地区の諸大学、研究所、病院の医学情報センターとして、先導的役割を果たしてきた。

このたび、総長裁量経費の採択を受け、百周年記念事業の一環として医学分館の蔵書による展示会を開催した。平成27年7月28日(火)～9月10日(木)には『解体新書』が生まれた頃～驚きの近代医学前史』と題して第Ⅰ期展示会を開催し、江戸後期から明治初

期までの医学書約40点を展示した。11月12日(木)～12月10日(木)には「レオナルドは人体構造の夢を見たか」と題して第Ⅱ期展示会を開催し、レオナルド・ダヴィンチの『解剖手稿』(複製版)を中心に展示した。

本展示会は、吉田忠東北大学名誉教授及び丸山芳夫医学分館長監修のもと、分館職員と学内ワークスタディスタッフ(学部生)の協働で準備し実施したものである。本学関係者及び多くの一般市民の方にご来場いただき、医学分館の蔵書を広く公開する機会となった。本稿では第Ⅰ期と第Ⅱ期の百周年記念展示会について報告する。

## 1. 第Ⅰ期展示会「『解体新書』が生まれた頃～驚きの近代医学前史～」開催記録

この展示会は、吉田忠東北大学名誉教授監修のもと、第1部「中国医学の受容」、第2部「腑分けから外科治療へ」、第3部「蘭方医学の普及」、第4部「はやり病(疫病)への対応」、第5部「医学の啓蒙と普及」、第6部「仙台の医学」の全6部構成で、江戸時代の医学小史と仙台における医学教育の展開をたどった。会期中の平成27年7月29日～30日に実施された東北大学オープンキャンパスでは、来場した高校生を対象に展示資料の人気投票イベントを行い、投票者には医学分館オリジナルブックカバーを進呈した。

- (1) 会 期：平成27年7月28日(火)～9月10日(木)
- (2) 開催日数：30日間
- (3) 場 所：医学分館1階ラウンジ
- (4) 来場者数：1,046名(アンケート回答56名)
- (5) 展示概要(以下は吉田名誉教授による各部の展示解説)

日本の医学は伝統的に中国の伝統医学に負ってきた。16世紀にはポルトガルをはじめとする南蛮医学が、また17世紀初めからはオランダから西洋医学(蘭方)が伝わり、やがて蘭方に対し中国伝統医学を漢方と呼ぶようになった。『解体新書』に象徴される



図1 第Ⅰ期展示ポスター

新しい西洋医学により古くさい漢方が駆逐されたというようなイメージがあるかもしれないが、江戸時代には漢方医のほうがはるかに多く、漢方と蘭方が併存していたことも留意すべきであろう。本展示では、医学分館所蔵の医学書によって江戸時代の医学小史をたどり、あわせて仙台における医学教育の展開を跡付ける。

## 第1部 中国医学の受容

日本の医学は古来中国医学の導入によりその基礎がつくられた。室町時代には直接中国へ留学する医師もいたが、江戸時代には鎖国政策の結果それが出来なくなり、専ら書物を通じて学ぶこととなった。輸入医書は稀少で高価だったので、中国医書の本文に返り点や送り仮名など訓点をつけた翻刻（和刻本という）が頻繁に行われた。これが可能だったのは、医療への需要の高まりはもちろん、旺盛な出版業、高い識字率がその背景にあったからである。

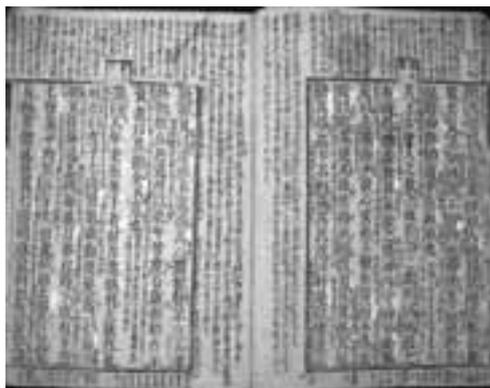


図2 『黄帝内経素問』

## 第2部 腑分けから外科治療へ

もともと長崎では、オランダ人医師から解剖書による解説や簡単な外科治療法について口伝えに教えられ、筆録したものがあつた。しかし『蘭学事始』にあるように、独力でオランダ語の書物を翻訳したのは『解体新書』が初めてである。ただこの翻訳の発端となった玄白らの腑分けの観察は初めてではなく、宝暦4年(1754)京都で行われたのが最初で、杉田玄白らの観臓は8度目である。玄白が唱えた、西洋医学の根幹には解剖学があるという認識が広まり、やがては漢方医のなかにも解剖学的知識を取り入れようとする漢蘭折衷の医師も現れた。



図3 『解体新書』

## 第3部 蘭方医学の普及

オランダ語の学習と西洋医学の情報入手が進むと、しだいに解剖学や外科以外の分野への関心が高まった。生理学・病理学の基礎医学を初め、内科・眼科・産科・小児科などの臨床医学の著書の研究・翻訳がなされるようになった。鎖国政策によりオランダ人との接触がきわめて限定されていたため、西洋医学の吸収は専ら医学書の読解・翻訳を通じてであった。オランダ人による本格的で系統的な西洋医学教育は遅く、安政4年(1857)に長崎に設けられた医学伝習所により始まった。



図4 『眼科新書』

## 第4部 はやり病（疫病）への対応

痘瘡（疱瘡，天然痘），麻疹（はしか），コレラなどの感染症は死亡率の高い病気として恐れられた。痘瘡流行の最初の記録は奈良時代の天平7年（735年、『続日本紀』）と言われるが、江戸時代にはほぼ間断なく流行を繰り返し、主に小児が犠牲となった。幸いに生き延びても、顔にあばたが残った。他方麻疹（最初の記録は998年）はおよそ20数年の間隔で流行したから、



図5 『新撰病草紙』

成人しても命を失うことがあった。「疱瘡は見目さだめ、麻疹は命さだめ」と言われた所以である。有効な治療法はなく、まじない札や絵を掲げ、またひたすら摂生する程度であった。

### 第5部 医学の啓蒙と普及

江戸時代には医師免許制度がなかったから、医学知識、技術、自信さえあれば基本的には誰でも開業できた。こうした俄か医師・医師志望者や辺境の情報不足の医師のために、簡便な手引書が刊行された。その一つが重宝記であった。これはまた漢文が読める町の一般人あるいは在村の名主など上層部の知識源ともなった。時とともに、医療の有効性が認識され、医療サービスへのアクセスが求められて医師が村落に定着・出向するようになり、また患者自身の自己診断のための医薬情報の需要が高まったのである。

### 第6部 仙台の医学

仙台藩における医学教育は、宝暦10年(1760)以来藩校養賢堂において医書講読により行われていたが、養賢堂第5代学頭大槻平泉や蘭学者大槻玄沢の建言により、文化12年(1815)医学館が創設され独立し、渡辺道可が初代校長に任命された。道可は文政5年(1822)全国に先駆けて蘭科を医学校に設け、蘭学者佐々木中沢らを招聘し、また同年解剖を行わせた。しかし、この拳は保守派の猛烈な反対を招き、道可の急逝により医学校蘭科は翌年廃止され、短時日の間に終わった。



図6 『医道重宝記』



図7 『仙台藩医学校蔵書目録』

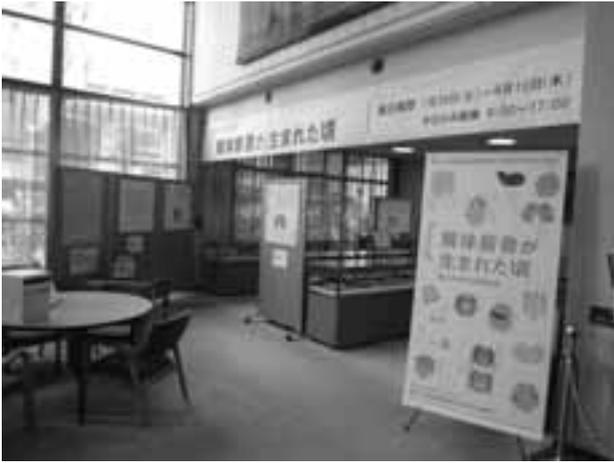


図8 展示会場の様子



図11 オープンキャンパスで賑わう館内



図9 医学分館沿革パネル



図12 オープンキャンパスイベント  
展示資料の人気投票



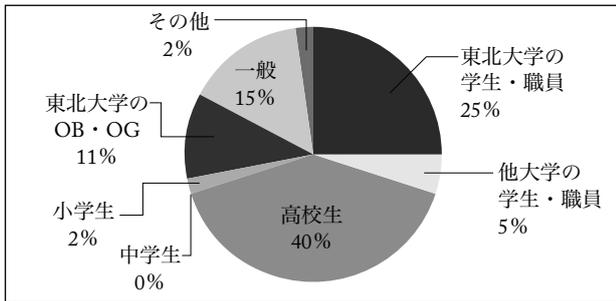
図10 展示資料を熱心に見入る来場者



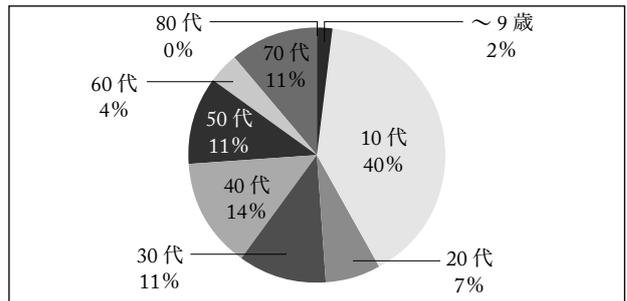
図13 オープンキャンパスイベント  
人気投票の状況と景品のオリジナルブックカバー

(6) 来場者アンケートの集計結果

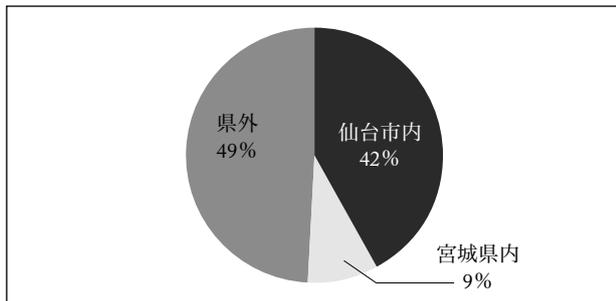
1) 所属



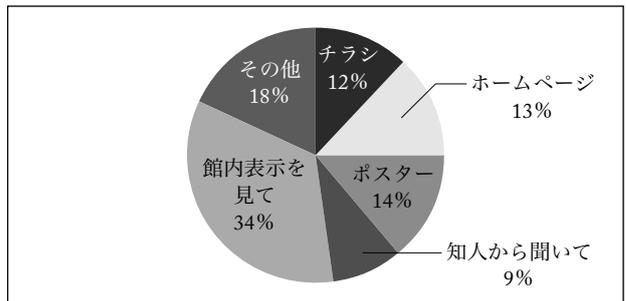
4) 年齢



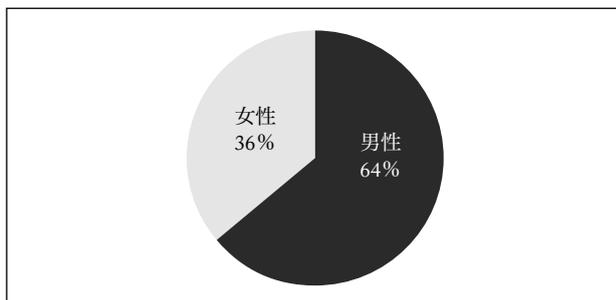
2) 住まい



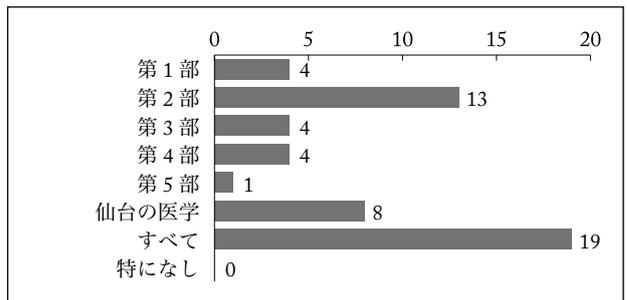
5) 展示会を知った場所



3) 性別



6) もっとも興味を持った部



## 7) 展示に関してのご意見ご感想 (抜粋)

- ・創立百周年おめでとうございます。東北大学の長い歴史を感じました。
- ・わかり易い展示でした。当時の人々の病に対する考え方の一端がわかったような気がしました。
- ・資料1つ1つの説明がわかりやすい。開いている部分もその本を表現するのによい部分だと思う。
- ・はっきりとした医学、医療の流れが描かれていると存じます。
- ・もっと体のいろいろな部分のことを知りたいと思いました。
- ・私自身漢方を勉強しているのでとても興味深かったです。華岡青洲の本、瘍科秘録などは初めて見ました。
- ・興味深かったです。中国の古い書物が使われていたとは知りませんでした。
- ・大変興味深く拝見させていただきました。
- ・現在は大学では、どちらかというと西洋医学が主かもしれませんが、漢方の特にツボや神経に関する混合的な知と療法が大事になるような気がします。
- ・昔、角館の宿で「解体新書」の原本を見せてもらいました。白手袋をはめて、和紙を一枚一枚めくりました。今はどこか資料館にあるようです。内容は無論わかりませんが、大変な仕事ということは感じました。「医心方」の訳があるのでゆっくり読みたいものです。
- ・実際に昔の医学に関するものが見られてとても興味深かったです。ありがとうございました。
- ・身分、職業が不自由であった江戸時代に「自信さえあれば誰でも医師として開業できる」ことに大変驚いた。村の小さな医師(?)から登場し、大名等の診療にあたった医師まで、さまざまなステータスの差を考えると、免許制になる前は医師というものは今で言う「街で有名な占い師」

みたいなものだったのであろうか？

- ・昔の和歌を見ると、このひとは何の花になぞらえて恋の歌などを作っているが、この人は薬草をさがしてその花で歌をよみ、この人の病気を研究した、ある大学の薬学部の教授先生の厚い本があります。本草の話が本展にもありますが、こんな方面から研究をした薬学者もおられるんだなど。
- ・昔の人の観察眼は素晴らしいと思った。そのおかげで現在の医学が発展して来たのだと思った。
- ・このような機会を全国規模でひらいていただければ、これまでの日本人の努力や向上心が若い世代に伝わると思いました。大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・こういった展示をもっと開催してほしい。非常に興味深かった。
- ・東北大医学部ならではの展示と思うが、もっと大きな規模の展示を期待したい。書籍の展示でいつも思うことですが、開かれている特定の頁しか見ることができないのが残念です。
- ・たまにこういった企画があると、初心に帰って勉強や研究のモチベーションが上がります。
- ・小規模な展示だったので、ひとつひとつに時間をかけてじっくり見ることができました。とても貴重な資料の展示、ありがとうございました。
- ・医学史を研究される分野があると面白いかもしれません。貴重な資料の展示、素晴らしいです。ありがとうございます。
- ・解体新書は名前しか聞いたことがなかったので、今回実物を見ることが出来て良かったです。今後もこのような展示会を続けていってほしいです。
- ・照明がショーケースに写ってしまい見にくいところがあった。
- ・目が悪いのでもう少し照明を工夫していただけると有難いです。

## 2. 第II期展示会「レオナルドは人体構造の夢を見たか」開催記録

この展示会は、丸山芳夫医学分館長監修のもと、第1部「解剖クロニクル：ハーベイまで」、第2部「ルネッサンス以後」の全2部構成で開催した。

(1) 会 期：平成27年11月12日（木）～12月10日（木）

(2) 開催日数：20日間

(3) 場 所：医学分館1階ラウンジ

(4) 来場者数：112名（アンケート回答12名）

(5) 展示概要

### 第1部 解剖クロニクル：ハーベイまで

年譜パネルにより、ガレノスからベサリウス、ハーベイまでの西洋における解剖学の概略をたどった。

### 第2部 ルネッサンス以後

レオナルド・ダ・ヴィンチの『解剖手稿』（複製）とベサリウスの『Fabrica』（複製・本館所蔵）、そして『解体新書』により、レオナルドからベサリウス、そして日本近代医学の黎明期までの解剖図譜をたどった。『解剖手稿』からは約20紙葉を展示した。



図14 解説パネル

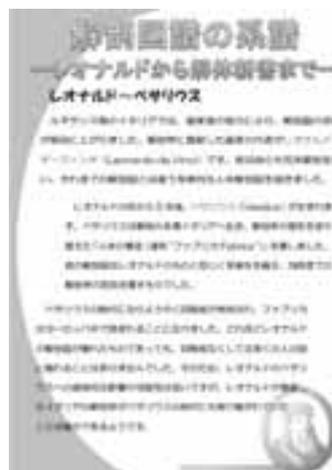


図15 解説パネル



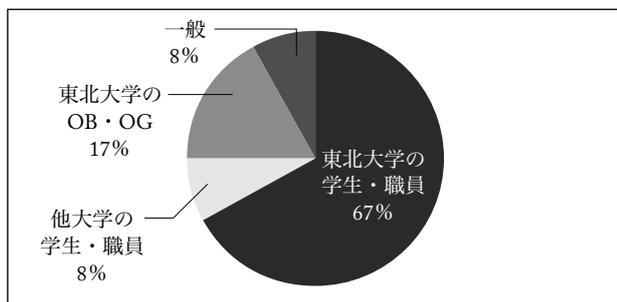
図16 展示会場の様子



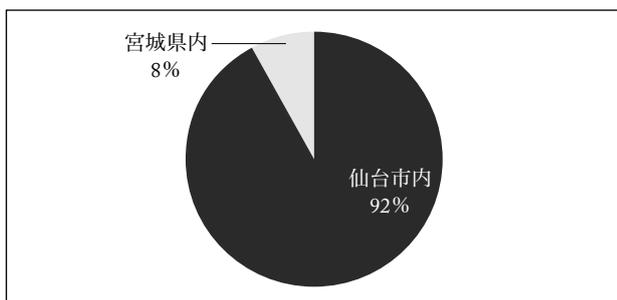
図17 『解剖手稿』の展示

## (6) 来場者アンケートの集計結果

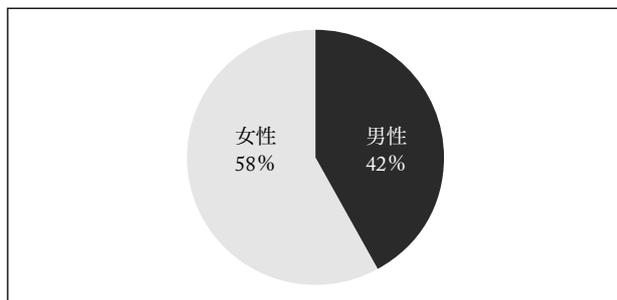
## 1) 所属



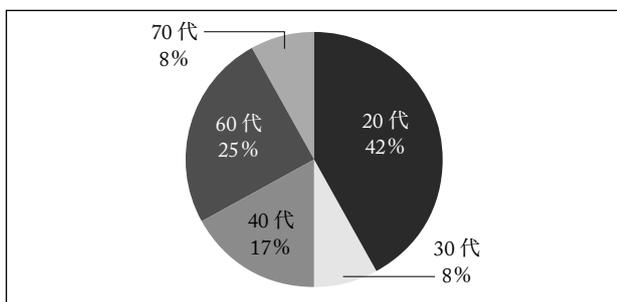
## 2) 住まい



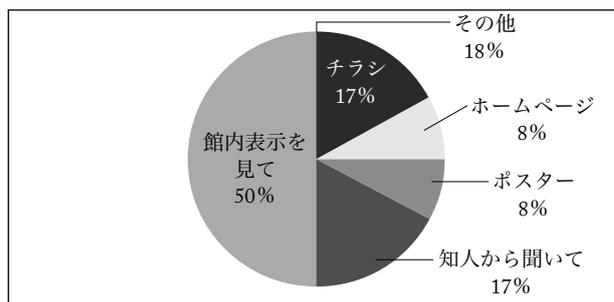
## 3) 性別



## 4) 年齢



## 5) 展示会を知った場所



## 6) もっとも興味を持った資料・事柄

- ・レオナルドの文字が左右逆になっている点。
- ・Vesalius の存在。
- ・人間が人間自身を理解していく過程。
- ・第2部ルネッサンス以後、人体構造論のパネル資料。
- ・ダヴィンチのデッサンがすばらしかったこと。
- ・解剖図の詳しく美しいのにはびっくりですね。
- ・解剖手稿をみるのを楽しみにきました。ダヴィンチの図だけでなく解説にふれ大きな発見がありました。
- ・解剖学の歴史。
- ・写真のようなイラストでした。すごい！！の一言。
- ・腹部の解剖図の細かさ。

## 7) 展示に関してのご意見ご感想 (抜粋)

- ・ダヴィンチのあまり見ることでできないものを見てよかった。
- ・解剖図の詳しく美しいのにはびっくりですね。
- ・解剖手稿をみるのを楽しみにきました。ダヴィンチの図だけでなく解説にふれ大きな発見がありました。
- ・百周年記念といわず、小規模でも常設で展示できる企画、スペースがあったらと思う。
- ・説明文がわかりやすくて良かった。
- ・夏の展示に続き今回の展示もとても興味深かった。
- ・今回のように貴重な蔵書があればまた別の機会にやって頂きたい。
- ・医学史の全体がわかって素晴らしい展示でした。
- ・布施文庫（標本や脳模型）の展示を希望する。
- ・今後も期待しています。

(よこやま みか, 附属図書館医学分館専門員)